

飯田龍太の俳句 —第五句集『春の道』・第六句集『山の木』より—

太田 かほり*

飯田龍太の十句集から第五句集『春の道』・第六句集『山の木』を考察する。龍太48歳から55歳にかけての作品に当たる。第一句集時代の若さと煩悶、第二・三・四句集時代の肉親との死別の悲愁を経て、第五・第六句集は、山国に定住し、いつしか甲斐の自然に融け込んでいった時代に当たる。生涯の代表作が多く、父蛇笏の「雲母」継承後の主宰としてのみではなく、広く俳壇の期待と信頼に応え、名実ともに評価を高からしめた時代である。龍太死後に「自選80句」が発見され、平成21年の三回忌に合わせて出版された『龍太語る』に掲載された。句集『春の道』全355句の中から6句、句集『山の木』全420句から18句が自選されている。前者には、昭和俳句の代表作の一つく一月の川一月の谷の中>が、後者には、広く愛唱されているく白梅のあと紅梅の深空あり>が含まれる。故郷甲斐の山河や風土を格調高く詠んだ名句が数多く収められ、俳人としての絶頂期の句集である。句集名は、第一句集から第四句集までの『百戸の谿』『童眸』『麓の人』『忘音』からすると平凡である。第四句集までは、郷里や家族など一人の人間の個人史に深くかかわりながら詠まれてきたものが知られているが、この期は、峻厳な山々に圍繞された郷里の自然に向かい合い、そこに溶け込む中から生れた作品が多い。そこには、郷里に定住する者の尊厳さが湛えられている。

Key Words : 風土, 自選, 雲母

はじめに

2011年3月11日の東日本大震災を境に俳壇の様相は変化を見せている。俳句は自然を対象と

* 人間学部児童発達学科

し、花鳥諷詠を旨とするところから時事的な素材は対象になりにくいものという考え方が根深くある一方で、戦争俳句に代表されるように俳句文芸にも時代を反映させるべきであるとの考え方が少数派ながら並行してきた。地震直後から新聞・雑誌等の投句欄に震災を詠んだ句が目立ち始め、朝日新聞の朝日俳壇のある日の金子兜太の選は、10句中9句までが震災をテーマとしたものであったほどである。専門雑誌においても、被災地応援の意味で特別企画が生まれ、震災俳句が量産されている。積極的に詠むべきと主張する俳人と当の被災者以外が安易に詠むべきでないとする俳人がいる中で、どの俳句雑誌を開いても地震・津波・原発に関する句が発表され続けている。今年度の蛇笏賞受賞の黒田杏子はその主宰誌「藍生」5月号において、震災を機に俳句は変わらなければならないと決意し、具体的には選を厳しくするという行動で示しているのが特に注目される。これは権威主義、師系主義に陥り、不易流行の精神から逸れぎみの現俳壇への痛烈な批判でもある。自分の句であれ、他者の句であれ、よい句を厳選して残すという姿勢に他ならない。この稿の研究対象の飯田龍太が「雲母」主宰者として最も重視したことは、「選は作者と一対一の対話である」「選に不安を感じたら続けるべきではない」ということであり、これが「雲母」終刊の判断の一つであった。現俳壇の重鎮である金子兜太、今年度蛇笏賞の黒田杏子の言行は、俳句の未来への指標になるものがある。ただ、それが大きなうねりに成長し、俳壇の変化になるかどうかは未知数である。横道に逸れるが、今年度蛇笏賞受賞に当って黒田杏子が書いた文章は心に残るものであった。改めて龍太の『「雲母」終刊について』を読み返し、一字一字を書き写し、龍太の偉大さを再確認したという内容であった。蛇笏賞とは、龍太の父蛇笏の名を冠した俳句における最高の賞である。龍太は長く選考委員を務めてきたが、龍太に直接師事した俳人以外からもその精神が受け継がれている。龍太の精神は俳句の未来への遺産というべきである。

おびたしい震災俳句の中では、福島在住の「小熊座」主宰高野ムツオが専門雑誌「俳句」（角川書店）5月号に発表した次の2句に強い感銘を受けた。

瓦礫みな人間のもの犬ふぐり 高野ムツオ

震災関連の報道は、しばらくの間はその他の話題をはるかに凌駕する分量であった。「瓦礫」は映像としても文字としても最も頻出するものの一つであった。その中に被災地の人々は「瓦礫」に「おもいで」というルビを振って読むのではないかという記事があった。瓦礫の中から思い出を探し出すのではなく、瓦礫そのものが当事者にとって掛け替えのない思い出であり、自分の過去そのものであるという認識である。それが瓦礫の処理が遅々として進まない理由でもあった。瓦礫という熟語は瓦と小石からなり、破壊された建造物の破片などをさす。また、値打ちのないつまらないもののたとえに使う。言葉の意味としてはその通りである。当事者が瓦礫と言いつかれるものも、永遠に言いつけれないものも、その全てが「人間のもの」すなわち人間の手によって形をなしたものである、という作者の認識は厳しい。人間の所有には美醜、益

無益、善悪などの二面性を同時に持っているものが少なくない。作者は「人間のもの」の中にプルトニウムを意識していただろうか。人間は、この自然界には存在しない元素までも作り出し、利用し、今、その塵の恐怖にさらされている。それらを含めて「人間のもの」と認識することは、人間自らが自分の所業を直視することである。

陽炎より手が出て握り飯掴む 高野ムツオ

涙の中の笑い、長閑さの中の空虚感。未曾有の震災を背景にした泣き笑いである。絶望の淵にあっても食べなければならないという人間の生を描いた厳しい現実認識がある。被災者が立ち尽くし、座り込み、倒れこんでいる場所が確かな所であるはずがない。一時しのぎの不確かなものの中に身を置く現実を「陽炎」としたのであるが、陽炎とは春の天気の良い穏やかな日に起こる現象をいい、陽春とは裏腹な現実とのギャップに慟哭は一段と深まる。どん底では飢えが極まる。作者は、「掴む」という荒々しい動詞を選択して、生への本能や生きる意欲などを描く以上に苛酷さ極まった現実を描いた。陽炎から手が出るという意表をつく発想といい、その幻想を握り飯を掴むという現実へ切り替える技といい、日本人というか、俳句というか、極限の不幸を描いてその言葉に笑いを潜ませる。強靱な俳諧精神である。

一．NHK学園俳句講座創設者としての龍太

昭和56年に飯田龍太が創設したNHK学園俳句講座は、平成23年に開講30周年を迎えた。NHK学園生涯学習フェスティバル俳句大会は、これまで郡上市・和倉市・市川市・別府市などで開催されてきたが、開講30周年を記念して同年9月2日、初めて龍太の出身地の笛吹市で開催された。同時に、NHK学園国内スクーリングとして「飯田蛇笏・龍太のふるさとを訪ねる～新涼の山梨～」が実施された。蛇笏・龍太の居宅であった山廬を当主であり龍太の子息飯田秀實の案内で見学し、夜は「飯田龍太の思い出」を聞くというものであった。

龍太・蛇笏をめぐる人々にとって山廬とはどういうところか、その一端が伺える龍太の一文を引用する。「佐々木菁子氏は、はるばる福岡から、何の前触れもなく、ひょっこり甲州山廬を訪れることがしばしばある。（中略）来廬の前に、途路の畑中にある蛇笏の墓参を済ませ、近くの小さな雑貨屋の前に、何分後迎えに来てくれるようタクシーの運転手に依頼するようだ。山廬を辞去して雑貨屋に戻ると、氏は、春秋いずれの場合も、かならず一皿の冷奴を注文する。それをサカナに、一杯の冷酒をゆっくりと味わう。雑貨屋のカミサンが、家内にそう密告したそう。たまたま私が家に居て、浅酌の相手をした場合でも、このしきたりは、かならず実行するようである。蛇笏はほとんど酒を嗜まなかった。特に冷奴を好物としたようでもない。にもかかわらず、このような儀式を欠かさぬのは、墓参し、旧廬を訪うて、氏の郷土における

たったひとりの時間を、田舎の冷奴にある風土の味を、しみじみ味わって帰りたいためではあるまいか。蛇笏・龍太の「雲母」会員は全国にどれほどいただろうか。また、私淑した俳人や読者の数ははかり知れない。彼らの多くが作品とその故郷を切り離せないものとして山廬および甲州山梨に深い思いを抱いていることの証左として引用した。

また、スクーリングでは、龍太に師事し、福田甲子雄とともに「雲母」を支え、終刊後に「白露」を創刊主宰した廣瀬直人指導の句会が催された。このスクーリングを通して、山梨の風土や龍太との縁の深い人々に親しく接し、筆者がこれまで龍太作品を通して感じ考えてきたものがより鮮明になってくるのを感じた。その第一は、峻厳な山容が望める山梨県笛吹市の自然を故郷とし、その自然そのものを文学の対象とすることからもたらされる恵みがいかに大きいかということである。若い時代の故郷への屈折した思いをはるかに凌駕するほどの恩恵がそこからもたらされたことは間違いない。第二は、蛇笏・龍太が全国の俳人にいかに強い影響を与えたかということである。その一例として、「雲母」終刊後に「白露」創刊主宰した廣瀬直人が龍太から受け継いだ精神が一回の句会指導の随所に表れていたことを上げる。龍太の直人への信頼の厚さや「雲母」終刊後を直人に託された理由が大いに頷ける句会であった。それはこれまで龍太追悼の記事から多く目にしてきたことであり、NHK番組「俳句」などで直人の指導を見る機会は少なくないが、メディアでは隠されたものを目の前で直に見る直人から感じ取ることができた。「いい句を選ぶ」「いい句への好奇心」は龍太を継承する言葉であるが、今では直人自身の言葉として使われ、俳句への志の深さを思わせた。句会の折々に龍太語録を手繰り寄せるような、また、俳句の世界の法悦に浸るような様子が印象的であった。龍太が「雲母」終刊の理由に挙げた一つは、選句に耐え得る体力がともなわないという点にあった。終刊の言葉の中で「選というものはあくまで対一の関係にあるもの。特に結社誌においては、そこに一瞬の怠惰も許されない厳しさで対処するのではなかったら、主宰の意味はないのではないかと思います。（中略）安易な添削は、その本義さえ損なうこととなります」と記している。龍太が30年間貫いたこの信念を直人も受け継いでいることが実感できた。直人は句会指導で「添削は作者の言葉で」と述べ、「俳句は自得の文芸」とした龍太の考えを貫いている。龍太は直人の作品について、「直人さん自身の作品には真竹のいろがある。それも真冬の、みずみずしく直立群生した趣があるように思う」（廣瀬直人句集『帰路』序 昭和47年）と評している。

俳句大会の第一部では俳人宇多喜代子による「自然の中で生きる知恵」の講演があり、第二部では事前に募集した俳句から6人の選者が選んだ特選2句と題詠1句の選評および表彰が行われた。選者には廣瀬直人始め、龍太に師事し「白露」創刊同人の井上康明が名を連ねていた。龍太は高潔な人柄で知られ、郷土山梨の山河とそこに生きる人々を愛する生涯であったが、その薫陶を受けた俳人に限らず地元の俳句愛好家にまで広く龍太の精神が及んでいることをが伝わってくる大会であった。

私事ながら大会において筆者の「くわんのんは女人におはす桃の花」が井上康明特選、廣瀬直人・坊城俊樹の佳作に選ばれた。この句は、龍太死去の平成19年に初めて山廬を訪ねた時の

印象を元にしたものである。飯田家の墓地の周辺には桃畑があり、収穫時や花の季節を想像すると山梨甲斐は男の国というイメージだが、桃の実といい、花といい、やさしい印象を受けた。龍太句集の中でも6歳で急死した次女純子、父蛇笏に仕え、5人の男子を育てた母菊乃の死を詠んだ絶唱をしみじみと味わってきたことから、山梨にちなんで桃の花を詠みたい、龍太周辺の女性たちをイメージして詠みたいと思い、得た句である。開会挨拶の中でNHK学園文芸センター長前田成志が「蛇笏・龍太の面影を重ねる」と解釈し、井上康明がそれを名鑑賞と述べたことは筆者の意を得たものであった。

二. 句集『春の道』

第五句集『春の道』は昭和43年夏から45年にかけて、龍太48歳から50歳の作品355句を収める。平成5年3月号「俳句研究」に自選150句が掲載されている。また、死後に自選80句が発見されている。これは実際には87句が書き込まれ、選句・推敲途上のものとされている。150句には『春の道』から15句、80句には6句を選んでいる。短期間の句集であることからその割合を単純に少ないとはいえない。何といたっても代表作く一月の川一月の谷の中>を収める句集である。

1. 龍太「自選80句」より

一月の川一月の谷の中

(昭和44年)

この句は飯田龍太の代表作の筆頭に上げられる。難解な言葉を使わず一月の川と谷のみで宇宙的空間までも描いている。単純化の極まりであり、俳句文芸というものをこれほど見事に表現した作品は多くはない。龍太自身も「幼児から馴染んだ川に対して、自分の力量をこえた何が宿しえた」(「自句自解」)と述べている会心の作である。

まず、表記上の特徴を見る。縦書きを基本とする俳句をこの稿では便宜的に横書で見ているが、それでもこの句からは視覚的な特徴が伝わってくる。因みに一ページをすべて龍太句で埋めて眺めてみたとしても、この一句はすぐに見つけることができる。際立った省略は字面にも表れている。普通の句は漢字と平仮名が交じり合った字面になる。たとえば飯田蛇笏のくをりとりてはらりとおもきすゝきかなのように意図して十七音すべてを平仮名表記した句の場合も視覚的な工夫に大きな特徴が認められる。龍太のこの句に使われている文字は五種類七つの漢字と一種類三つの平仮名である。使われている漢字の画数はいずれも極端に少なく、一・三・四画、最大でも七画に過ぎない。また、「一月」が二回、「の」が三回繰り返され、文字の使用範囲が厳選されている。この3点から、使用している文字の視覚からの印象が大きいことは否めない。少ないということは単純・省略、さらには、余白・余情へ、抽象へとつながっていく。

次に、情景をみる。一月の景色の一番の特色は、一年の始まりの厳肅さ・緊張感・淑気を含み持っている点にある。寒さや冬枯れという点からすると二月の方に厳しさを極まりがより強く認められるが、その二月ではなく年の始まりの一月を選択した点がこの句の命である。季語が繰り返して二度まで使われていることを無視できない。年頭の一月の改まった厳肅な心持で作者は自然に向かい合っているのである。川は、山とともに自然の代名詞である。冬の川は水量を減らし、砂や小石が露になった川原の方が面積を占めている。流れるといっても滔々とはいかない。しかし、川は流れる。自然界の生き物が動きを止めた中に、水量を減らし、水音を低くしながら、川は命あるもののごとく躍動を止めない。だが、その全長も全景も見晴らすことはできない。一月の気が漂う谷を縫って見え隠れしつつ流れる川である。川と谷のみを描いて大自然の一角を切り取り、一月という人間の概念を据えることによってこの景色の延長上のこちら側に人間が存在していることを暗示する。

この句について大岡信は、『白一色の画面の上に白の図形を描いて、たとえば「白の上の白」という題の作品完成させるべく苦闘する抽象画家のことを思い起こさせる』（『現代俳句全集第一巻』）、『川は文字通り宙に吊りあげられた位置において登場するのである。ついで突然、われわれの眼は真逆様に一月の雪に埋もれた谷へと誘われる』とし、『一、月、川、谷、中——これら単純で字画の少ない、左右相称の漢字の効果は、この句の生命に深く関っている』（「管見飯田龍太の句」より）などと絵画的立体的な捉え方をしている。

長谷川權は、『白い紙にバサッと太い墨痕を走らせたような句』、『言葉が描き出すのは一つの谷とそこを流れる川のみ。しかし、この句のほんとうの魅力は描かれたものにあるのではなく、簡潔に引かれた谷と川によって浮かび上がる、まわりの大空間にある。（『読売新聞』2007年2月28日付）』と書いている。

筆者は、どれとも異なった映像を想像する。場面は幽山溪谷というものではなく、もう少し親しみやすく人家に近い。水墨画の筆は渴筆がふさわしく、一思いに走らせた線は擦れ、川に覆いかぶさるように谷が迫って、木々は枯れ枝を交し合って錯綜し、その合間にところどころ流れる川が垣間見られる。画布に描くとすれば左右は大きな余白となる。句を絵にすると三様になる。このように句の具体的な光景は各自の生活環境や生育環境などによって異なるのは已むを得ない。

そもそもこの句は、発表後、論争を呼び、俳壇を越えて話題を投げかけた経緯がある。俳句史の中には名句とも駄句とも議論の対象となりながら未だに決着のつかない句が少なくなく、たとえば、

鶏頭の十四五本はありぬべし　正岡子規
帚木に影といふものありにけり　高浜虚子

などは、多くの歳時記に記載され人口に膾炙されている。これらに共通して指摘されるのは、

「十四五本」「帚木」の部分が他にいくらでも置き換えられ、これでなければならないという決定打がないという点である。

龍太の句にもどるが、「一月」は他の十一月に置きかえられるだろうか。この句の光景は寸分の無駄もない厳しい自然である。厳しさというだけならば二月の方がより深い。三月とすれば山国にやってくる春の気配が描ける。初夏、梅雨時、真夏などもそれぞれに季節感が伝わってくる。それらを選択せず確固として一月を据えた理由を理屈で述べて納得を得ることは極めて困難である。繰り返しになるが個人の感性の違いを侮ることはできない。

この句に注目し早くから評価した俳人としては高柳重信・中村苑子が知られている。前衛的抽象派の中村苑子は、『かがやくような作品が光りを競いあったなかでも、特に抜きんでて核が高く、句柄が悠然としたたずまいをみせている』『句意も、そこに現出する実景も、口を噤んで何も語らず、表現以外の連想をきびしく拒んでいる句である』（「俳句研究」昭和44年2月号）と評価した。また、『あらたまの年を迎えて輝くように谷間を流れる郷土の川に凜々とした一月の淑気を身に感じている作者が見えてくる』（「俳句研究」平成5年3月号）と書いている。

一方で、具象派の野沢節子、鷺谷七奈子は、血肉が感じられない、骨だけの感じ、はらわたを掴んでほしいなど、否定的であった。

山本健吉は、石田波郷の<琅玕や一月沼の横たはり>を上げ、「暗黙のうちに翳を落してはいないか」（『定本現代俳句』角川書店 平成2年刊）としている。

前述の通り、作者龍太は、「幼児から馴染んだ川に対して、自分の力量をこえた何かが宿しえた」（「自句自解」）としている。

筆者は平成23年9月1日、龍太の長男秀實の案内で山廬を訪ね、その裏に続く後山を見る機会を得た。龍太生涯の代表作が生れた狐川への関心は強かったが、果たして、狐川の景観は想像を大きくはみ出るものではなかった。龍太の随筆の描写や写真集からの想像であったが、屋敷内を流れるという点を除けば、これまでにどこかで何度か出会った小さな谷川であった。龍太の狐川は格別の川ではなかった。言い換えればどこにでも見られる谷川らしい谷川であった。一月と九月の違いはあるものの紛れもなく日本の風土に流れる川であった。しかし、紛れもなく龍太の川であるという実感があった。名句の舞台となった谷川は爽秋の気配をまとめて流れていた。秋には秋の流れとなり、冬には冬の顔を見せて流れる川である。年の初め、この河のほとりにたたずんだ龍太が新春の厳かさを感じたことが頷ける。新年の肅気は、山廬を出て庭石を踏み、後山へと歩き出し、せせらぎの音を彼方に聞き、手前の池の水を見るうちにも龍太の身の内にすでに漂う気配であっただろう。新年の清新さで辺りを眺める目にも、耳にも、心にも、それは満ちていただろう。見慣れた景色にその季ならではの気配を見ることが日本の四季が磨いてきた日本人の感覚である。龍太の名句は日常の中の節目の感覚が身の内から押し出されたものである。その節目が正月であり、昨日と変わらない風景の中に自ずと厳肅さが湧き出ていたのである。狐川は平凡な川であった。後山もまた平凡な小山であった。龍太でなければ経験できない山川ではないことが、共感を得る名句を生み出したといえないだろうか。狐川

という個を日本人の川に普遍化したといえないだろうか。しかし、蛇笏・龍太の俳句の舞台となった狐川・後山はそれらの作品ゆえに特別の自然である。在りし日も亡き後も蛇笏・龍太の山河を訪ねる人が後を絶たない所以である。

現地を見る前も見た後も筆者の解釈は変わらなかった。つまり、俳句の解釈鑑賞は各人の成育や生活の自然環境によって培われたものに負うところが多いということである。雪の中に流れる川とするのも、宙から滝のように落下すると川とするのも解釈鑑賞の幅である。

白い肌着のなかの膚の小六月

（昭和44年）

陰暦十月を小六月という。雨風が少なく、春を思わせる日和が続くところから小春とも表現され、季節は冬に分類される。厳冬には間がある頃であるが、外に向かいがちの気持がしだいに内向きへと変わり、身辺への関心が細やかになってくる季節である。肌着についての龍太の一文を引用する。「肌着はことさら人目にふれるものではない。しかも常に清潔に、絶えず着替えなければならないものだ。どんな意匠のものでも、どんな上質のものでも、洗濯を怠って着古したら肌着の意味はない。しかも、着替えするたびに、自分の裸の肉体をまざまざと見なければならぬものである」（廣瀬直人句集『帰路』序 昭和47年）肌着への龍太のその認識を踏まえて鑑賞したい。龍太には白い肌着を詠んだ句が他にもある。それは月光に照らされた亡母の遺品の肌着であった。この句の肌着は健康な肉体を包みこむ。それも日中であろう。昼の暖かさにふと膚を意識し、それを包む肌着の白さを思う。心身ともに何事もなく、外界も平穏な一日の幸せが感じられる。

種蒔くひと居ても消えても秋の昼

（昭和44年）

「田を植えるひと」ならば「居ても消えても」とはならない。田植は、田水を張った田の色が支配する世界に瑞々しい早苗の色が一行に一面に並んでいく光景であるから働く人の存在は風景を支配するからである。人が居ることは風景の色彩が土色から早苗色に塗り替えられていくことであり、人が消えることはそれが中断するか終了することを意味する。それに、田植時は雨が多く空模様を気遣いながらの労働となり、雨になれば人が消えるというものではなく、降ろうが照ろうが仕事は続行される。その比較からすると、秋の農事は天候に従い、晴れば田に出、雨の日は籠もるといふものであり、遠目には仕事の進捗具合は分からない。今日のうちにとということもなく、明日でもさしたる支障がないのが秋の種蒔である。この句は人や農事に焦点を絞らず、秋が定まった頃の昼日中の平穏さを描いた。穏やかな秋が種を育み豊かな収穫を約束しているように感じられる。

釣鐘のなかの月日も柿の秋

（昭和44年）

龍太の故郷境川は桃と葡萄の産地である。桃畑や葡萄畑はその産地ならではの個性的な風景を作り出す。斜面に広がる葡萄棚は稲作中心の日本の農村風景を見慣れた目にはエキゾチックに映る。この句が詠まれた昭和40年頃の甲州が今の風景に近いかどうかは別として、日本のどの地方にも共通しているのは、秋になると柿が色づき、風景のアクセントになることではないだろうか。柿の朱色は遠目にも鮮やかである。そこに一本、ここに一本、熟した実をつけた柿の木が点々と眺められる風景は、日本の最も日本らしい風景といえる。それは、日本人の郷愁の風景である。そこに寺の屋根、そして鐘の音を加えればもう満点の郷愁である。

風の彼方直視十里の寒暮あり

(昭和45年)

この句について書かれたものではないが龍太自身の文章を引用する。『甲府の市街を抜け、釜無川の堤にかかってうしろをふり向くと東の空に大きく富士山が浮かんだ。前山の御坂山系で下部が切れる。五合目あたりか。石膏のトルソのように、安定した姿だ。雪襲の彫りがいい。古代ギリシャの騎士像といった感じだ。北の方、釜無川の上流に目をやると、甲斐駒と秩父山系のぽっかり開いた空間に、どっしりと八ヶ岳が据わる。山裾をたつぷりとひらいて、季節は違うが、まこと、<霜つよし蓮華とひらく八ヶ岳 前田普羅>の偉容。東の富士は天空に登仙し、北の八ヶ岳は地に端座して重厚。こころみに地図をひらいて、指で略測すると、ここから富士まで、直線距離で約十里(約四十キロ)。八ヶ岳もこれまた約十里。十里を距てて眺める山の姿は理想的だ。それぞれ貫禄のある山の証拠だ』。龍太は珠玉の随筆を多く残しているが、殊に郷里の風景描写は他者のいかなる鑑賞にも優る自句自解になっているといえよう。

まさに暮れ切ろうとしている冬の甲府盆地のとある場所からの眺めである。日没近く、昼間とは異なった表情を次々に見せた山容が真闇の彼方に隠されようとしている。

炎天のかすみをのぼる山の鳥

(昭和45年)

山廬は山深いところに位置しているわけではないが、敷地内を狐川が流れ、小さな池もあり、そのまま雑木の茂った後山へと続いている。水辺の鳥も見られる環境ではあるが、やはり野山に棲息する鳥の方が身近だろう。後山の坂道を登ると視界が開け平らになった場所に出る。そこからは四方の山並が眺められ、一角に近くの高山があるものの遮るもの少ない大空が見上げられる。この環境は山の鳥を隣人とする日常を思わせる。炎天下では人も息を切らしながら坂道を登るように、飛ぶことを慣わしとする鳥とても軽々と飛べるものではないだろう。炎天はその暑さのあまり霞を帯びて明度を下げている。重たい空である。空気抵抗が大きそうな空へ、その高みへ、鳥が登っていく。

2. 龍太「自選80句」拾遺

雪の一茶いまくらやみの果にあり

（昭和44年）

一茶は信州信濃に生まれ、放浪の果てに故郷に戻って晩年を過ごした。龍太も若い頃の数年を東京に暮らし、再び山梨に帰郷してその地に深く根を下ろすという人生を送った。二人の故郷が隣国同士という位置関係にあることは、龍太の一茶への親しみになっただろう。また、龍太の随筆の中に一茶を「農俳人」と表現し、自分との境遇の一致に親近感を抱いていた。龍太の甲斐は雪が多い地方ではないが、いつしか降り出した雪が辺りを覆いつくしてなおも降り募っている。思いは隣国の俳人へと向かう。いや、過去のというべきか。一茶に「これがまあ終の住処か雪五尺」がある。豪雪に甘んじる暮らしの難儀が思いやられる。「うまさうな雪がふうわりふわりかな」「雪解けて村いつぱいの子供かな」など、一茶の雪の名句はたちどころにいくつも浮かんでくるが、辞世の句に見られるように雪害は一茶の暮らしをさまざまに阻んだはずである。今しんしんと降り積もっていく雪は一茶を閉ざした同じ雪である。自分が今いる空間の果てに雪に思案の一茶がいる。「くらやみ」が一茶の難渋をほのめかす。

雪の日暮れはいくたびも読む文のごとし

（昭和44年）

甲斐は雪国ではない。いつの間に降り出したのだろうか、ふと気づいた雪に心が騒ぐ。ほのかに童心が兆す。日暮れである。窓辺だろうか、縁側だろうか、再び三度近寄っては外を眺める。降る雪を目で追いつついつしか時を遡っていく。降る雪と夕闇に遮られて視界から物の形が薄れやがてすっかり消え去る。代って一枚の大きな画布のような空間が目の前に広がる。自在にもを描ける大きな空間である。過ぎ去った日々の断片が浮かんでは消え、消えては浮かぶ。静かに雪は続き、夕闇はずんずん濃くなっていく。庭木や塀など物の形がすっかり隠された戸外に目を注ぎながら、いつしか物思い誘われていく。いくたびも浮かんでは消え、消えては浮かぶよしなしごとは、しっとりと心を潤していく。外は雪、夕闇は迫る。物音も物の形もおぼろな中に静かにたたずみ豊かな時間に身を任せる。時が流れる。寒さも心地よい。それは、一通の古いあの手紙を何度も取り出しては繰り返し読むような、懐かしさで満たされた時間である。

受験日の十字路に雪舞へるなり

（昭和44年）

人生に十字路は何度もやって来る。その都度決断を迫られる。迷いは多く、誘惑も多く、誰彼の助言の重みを見無視はできず、己の夢を絶つこともできない。十字路の道しるべは四方向を示す。選択できるのは一方向だけである。迷う。今まさに大きな岐路に立っているという自覚

は慎重さを促すが、思いは千々に乱れて迷いに迷う。どの道行くも前途は未知数である。雪の舞う中、目を凝らしても視界はきかない。途方に暮れる。目を頼れないとなると己の心に従うしかない。その心が見えない。自分の心が卍をなして定まらない。雪も卍にしまき、乱れ、舞う。受験日の青年の置かれた心象がそのまま雪の十字路である。

騒然と柚子の香放てば甲斐の国 (昭和44年)

柚子は花も実も清々しい香気を放つ。ことに実はどのような膳にも欠かせない名脇役を演じる。その香りが珍重される冬の果実は何といても柚子である。黄色く色づき、冬枯れの中で目立つ。他家の庭に見るのもうれしいものである。鈴生りであればどれほど香ることか。食膳ではほのかな香りと色を楽しむ。さて、甲斐は男の国である。武田武士の威風を引く土地柄である。険しい山々に圍繞された山国である。季節になると山裾や山間など至る所から柚子が名乗りを上げる。その香と色で己を主張する。男の国、武田武士の国らしく、柚子さえ益荒男振りを発揮して、そこはかともなく、ほのかにでもなく、かそやかにという風情でもなく、「騒然と」香る。ざわざわと目にも見える香りを放つ。軍勢のように、荒武者のように、勝ち名乗りのように、豪勢な匂いの束が解かれる。それが、甲斐の国である。

花野来し隣り座敷の老夫婦 (昭和44年)

聞くでもなく耳に届いてくる隣人の話し声が今し方通って来たらしい花野のことに及んでいる。七草はじめ千草や百草の名前が溜息交じりに次々に上げられていく。尾花のそよぎ、葛の色や香り、女郎花の丈、撫子の可憐さなど、媼が語り、翁が応え、翁が言えば媼が応え、どこまでも話が弾んでいく。どうやら年取った夫婦のようである。夫が話せば、妻が応える。間を置いて妻が繰り返す、夫が相槌を打つ。次第に途絶えがちになりながらもゆったりと会話が続いていく。襖ひとつ隔てて老いた一組の男女の醸し出すそこはかとないう雰囲気にしだいに惹かれていく。歳月が練り上げてきた老夫婦の呼吸のよさ、老いのよろしさが漂う。

三. 句集『山の木』

句集『山の木』は、昭和46年から昭和50年まで51歳から55歳までの作品420句を収める。150句には『山の木』から25句、80句には18句を選んでいる。正に龍太充実期の句集といえることができる。広く愛唱されているく白梅のあと紅梅の深空あり>始め、く水澄みて四方に関する甲斐の国>くふるさとは坂八方に春の嶺>くかたつむり甲斐も信濃も雨のなか>など、風土を格調高く詠んだ句が含まれ、名実ともに昭和を代表する風格を有する句集である。

1. 龍太「自選80句」より

大鯉の屍見にゆく凍のなか（昭和46年）

村に一大事が出来た。ゆうゆうと泳いで村人の馴染になっていたあの大きな鯉が屍となって浮いているというのではないか。これが大事でない訳がない。鯉である。何年も生息していた長寿の鯉が死に至ったとは、一村の大事件である。それ、行け、見に行こう、とばかり驚いて取るものも取り敢えず、褌を締め直して戸外に出る。鉢巻を締めたかもしれない。血気盛んな村の壮年たちが総出の騒ぎである。野次馬根性というなかれ、静かな平和な村の大きな出来事に他人顔ではいられない。逸りながら、帯は道々結んだかもしれない。とにかく急げ。鯉の死を見届けなければならない。なぜ死んだかの理由を知りたいのでもなく、その始末にかかわろうというのではない。鯉の死そのものへの驚きが行動させる。凍りつくような寒気。寒かろうが行く。行かずにおれない衝動が走ったのである。村に暮らすとはこんなことである。

冬深し手に乗る禽の夢を見て（昭和46年）

「手に乗る禽の夢を見て」は命の温もりへの懐かしさをいったものではないだろうか。それも小さな生き物の命である。掌に小鳥を乗せた触覚は五体の中でそこだけ生々しく現実的である。目で見える鳥の姿や耳で聞く鳥の声ではなく、手に乗せて感覚する鳥である。前者は詩歌で普通に登場し、花鳥諷詠の鳥として読者に親しい。後者には生活臭がある。どんな暮らしの中から手に鳥を乗せる場面が設定されたのか。文鳥や十姉妹やインコなど雛のうちから馴らすと手乗りになるが、愛玩というより自然界で偶然に人間の掌に乗ることになった鳥ではないだろうか。他の生き物に襲われるか、何かの理由で痛手を負うか、山廬の環境の中ではこんな場面も起こり得る。厳冬の夜の夢とするとほんのりと温かい。夢が入り込んでくる隙間もないほど冬の寒さは極まっている中にこのような夢を楽しみ、冬もまた楽しんでいる緩急の差異がおもしろい。

陽炎や破れ小靴が藪の中（昭和46年）

不思議な句である。陽炎の立つ春の長閑な日中のこと、現実と非現実が交錯するような場面設定である。現実にあって不思議ではない風景だが、単純に写生でもない心象のような風景である。日本のどこも藪は珍しくなく、廃棄された物が紛れ込んでいることなどはよくある。不思議でも何でもない。だが、どうにも腑に落ちない不思議な句である。うららかな春、彼方の竹藪をゆらゆらと陽炎が揺らす。陽炎は光の屈折が見せる現象だがその空間を異次元と感ずることは許されるだろう。ところが中七の「破れ小靴」は現実そのものである。「破れ」とは何か。破れた靴だから藪に放置されたという筋道はつくのだが、俳句の素材が卑近な物にも求め

られるとはいえ、それが詠む対象になるか。「小靴」となぜしたのか。小靴や大靴はあまりない言い方である。造語になるか。下駄ならば陽炎の立つ長閑さを打ち消さないが、靴には生々しさが残る。しかも破れた靴、すなわち人が履いた歴史が残っている。下五の「藪の中」は、芥川龍之介の短編『藪の中』、及びそこから派生した意味が揺曳するものはないか。また、子どもと藪の中からかぐや姫への連想は全くないか。この句の「破れ小靴」がふと六歳で急死した次女純子を想起させるものではないかと気づく。龍太は選について、「没になった句に愛着があるというなら、捨て去るべきでない作者の大事な作品である」(「雲母900号」終刊について)と記しているが、龍太自身にこの句に深い思いがあったのではないかと思える。また、龍太は俳句の鑑賞を不要なものとしているが、この句は他者による鑑賞を特に拒んでいるように思う。

ふるさとは坂八方に春の嶺

(昭和46年)

山廬のある小黑坂は坂の集落である。傾斜の急な小黑坂の更に上に大黒坂があり、家を建てるには石垣を積んで平地を確保しなければならない。有名無名を問わず山廬を訪ねる人は蛇笏・龍太生前の頃から後を絶たない。人々は父子それぞれの俳句作品からその故郷を想像してこの地にやって来る。山国甲斐の古地図に現在の山梨県の地図を重ね合せてその一点に山廬を置いてみる。そこが父子二代の俳句の故郷であることにあらためて感銘を受ける。都塵を離れたそこに一時代の文壇が栄えたのであるから感動は深い。読者はこのようにこの句を読むが、平面的な地図上に坂も山もある立体的な地形図が立ち現れ、龍太の故郷を実感的に捉えることになる。八方に坂が通い、八方に嶺々が巡るそんな中に百戸の村が鎮まっている。

盛りこぼれつつことごとく柚の實かな

(昭和47年)

豊作である。一つまた一つと足していくにつれて籠は瞬く間にピラミッド形になっていく。納まりの悪いものは遠慮なく零れ落ちる。みるみる柚子の山である。歪な形といっても果実であるから丸い。丸いものは転がり易く、転がっては拾われ、拾われては元の籠に盛られ、盛られては他の一つがまた転がる。黄色い香りも籠をはみ出して辺りは柚子一色、黄色い香りに包まれる。柚子の他に蜜柑や橙など別の果実が交じるわけではない。形も香りも紛れもなく柚子である。大きいといっても小さく、でこぼこと愛嬌がある。どの一つも個を主張してどこかが違って同じものとならない一籠である。ひたすら柚子であることの限りない幸福感、だが、慎ましい幸せである。

かたつむり甲斐も信濃も雨のなか

(昭和47年)

近景に蝸牛、遠景に国境をなす峻巖な山々。幾日も続く雨の下では山々の姿は定かには見え

ないのだが、そこを故郷、それも永住の地と定めた者の目には晴れた日のごとく浮かび上がってくる。甲斐は我が故郷、信濃は隣国、共に山国である。甲斐という古名を使えば隣の信濃が自ずと意識されてくる。その昔の領土争いの歴史も髣髴とする。だが、悠久の自然に対して人間が区切った国の名は時として無意味となり、天が下は等しく梅雨という季節に鎮まる。雨の季節を肯う。渦を巻いた殻を背負って蝸牛がゆっくりと動く。愛すべき小動物である。他のあまたの生き物たちも人も雨に平伏する季節である。

朧夜のむんずと高む翌檜

（昭和47年）

春の夜は人の想念を育む。朧夜はなおさら。動植物も同じだろう。翌檜に心があるかどうか。ふと、翌檜を眺める心に翌檜へのエールが湧いてくる。明日は桧になろうという俗説は清少納言の時代には早くも広まっていたらしく、名前の由来への関心が『枕草子』に記されている。芭蕉も、明日は明日はと日を過ごすことに何かしら感じたようである。井上靖の小説『あすなる物語』は、登場人物の冴子の『あすは檜になろう、あすは檜になろうと一生懸命考えている木よ。でも、永久に檜にはなれないんだって！』という台詞が桧の説話をよく語っている。龍太はこれらを十分承知の上で、部の悪い翌桧に肩入れした。明日は桧になろうという名を負う雑木が「むんず」と力を漲らせて夜空に向かって大きく成長したという新しい説話を創作したのである。物笑いになってきた翌桧の可能性を春の夜の朧は柔らかく包み込む。春は動植物を育む。夜は動植物の成長を促す。季語の働いている句である。

雛を手に乗せて霞の中を行く

（昭和48年）

雛が孵るのは春ばかりとは限らないが、あのふわふわと愛らしいひよこが犇めき合っている様子は、麗かな季節がふさわしい。春こそひよこの季節である。移動の手段ならば籠に入れるのも追い立てて歩かせるのも方法であるが、その愛らしさは「手に乗せて」が一番。一匹だろう。生き物だから動く。うっかりすると手から墜落という事態になるのを、注意深く落ちないように落さないように雛の命第一に運んでいく。か弱いことこの上もなく、はかないことこの上もない。いずこからいずこへ行くのだろう。霞の中に生れ、霞をまとったまま、霞の中へと運ばれていく命である。

白梅のあと紅梅の深空あり

（昭和48年）

<むめ一輪一りんほどのあたたかさ>と服部嵐雪が詠んだ梅は白梅だろう。まだまだ寒気の強い中にたった一輪ほころんだ梅は、自然界の春の兆しを告げるものとして格別な喜びをもたらす。春は躊躇いがちに、あるいは行きつ戻りつしながら、しだいに歩みを進めていく。一輪、

二輪、やがて見頃を迎え、在来種の甲州野梅は、いつしか白は紅へ座を明け渡す。寒気の勢力下に白梅は咲く。白梅の終わった空にやがて紅梅が咲き始め、空には鮮やかな青色が広がる。紅梅を仰ぎ見た目は彼方の青空の深さに春の深まりを感じる。梅の紅は青空に映え、青空は紅によって一段と瑞々しさを深める。白梅の季節を惜しみつつ、紅梅の季節の到来を喜ぶ。白梅の彼方にも深空は広がっていたかもしれないが、一輪毎の白梅を愛でるあまり見落としていたかもしれない。紅梅の咲く頃になると、待春の心にもゆとりが生じるのだろうか。否、少し季節を進めた空そのものが青の深みを増したのにちがいない。春へ、本格的な春へと一歩を進める季節への感動がある。

この句に関して山本健吉は、「白梅」「紅梅」の読み方を初め「しらうめ」「こうばい」と訓と音で読んでいたが、龍太自身の「自作ノート」の記述に「花卉がキッパリ咲く。凛々しい感じだ。」とあるところから『龍太自身は「はくばい」と音読していると思えて来た』と書いている。また、『(白梅と紅梅について)時代の好尚、人の嗜好によって、さまざまある中に、龍太氏の俳句はそれぞれの長所を認めているのがよい。その円満さが、言わば、「深空あり」に籠っていると見てよいのではないか。その点でこの句、光琳の『白梅紅梅図』屏風の円満さに通じているかも知れない』(『定本 現代俳句』角川書店 平成10年刊)と書いている。

黒猫の子のぞろぞろと月夜かな

(昭和48年)

春の夜である。生れて間もない子猫の兄弟姉妹が、まろびつ転びつぞろぞろと連なって月夜に浮かれ出てきた。小さく、愛らしく、どれも黒い子猫である。仕草の一つ一つが可愛い。朧月夜の淡い光に照らされて子猫のシルエットが影絵のように浮かび出る。背景に朧月を置いた舞台上で繰り広げられるメルヘンチックな光景である。子猫に親猫の持つしなやかな媚態はなく、黒猫の凄みもなく、無垢な命の健気さがあるのみである。それを柔らかな春月が効果的に引き出している。この頃、龍太の俳壇の地位はゆるぎないものとなっており、蛇笏・龍太と続く稀有な二代の俳人は尊敬の対象となっていたが、この一句から作者の意外な一面がのぞく。「ぞろぞろ」という俗語の響きが大家と読者との距離を縮める。龍太アルバムには愛猫クロと遊ぶ写真が収められている。

三伏の闇はるかより露のこゑ

(昭和48年)

夏至後の第3の庚の日を初伏、第4の庚の日を中伏、立秋後の最初の庚の日を末伏といい、この三つを合わせて三伏という。夏の最も暑い時期である。夜も深まったこの夏の最中に、すではるか彼方より初秋の気配が忍び寄ってくる。それを「露のこゑ」というかすかな気配で察する。露は闇の中にきらりと光って視覚に捉えられることもあるが、その声は容易くは耳に達しない。耳に届くものではなく心や肌でそれとなく聞くものである。しっとりとしとどに結ん

飯田龍太の俳句（太田かほり）

だ露もあるが、あるかなきかのかそやかさで、耳を心を五体全部を澄ますことによって感じられる露の気配である。真夏の中に潜む秋の気配を夜の闇に見ているのである。『飯田龍太全集 第4巻 随想Ⅱ』（角川書店）の見返しには、この句を書いた龍太の色紙の写真が載せられている。

群嶺群雲紫陽花の季なりけり

（昭和48年）

ホトトギスで活躍した前田普羅は、昭和12年の早春に山廬の蛇笏を訪ねて、<駒ヶ岳凍てて巖を落しけり><奥白根かの世の雪をかがやかす>という生涯の代表作を生んでいる。山廬の地続きにある後山に登ると晴れた日には甲府盆地を圍繞する山々が眺められる。西には3000メートルを超える白峰三山をいただく南アルプスの峰々、その北寄りには2000メートル級のハヶ岳、さらに奥秩父の連山が続き、まさしく山襖の景観である。連なる嶺々には四季折々にさまざまな雲がかかる。梅雨時は群れる山々に重たい雲が群がる。彼方の山並みを眺めた目を近景に戻せば群れた紫陽花が重たげに花を垂れている。

枯山の月今昔を照らしめる

（昭和49年）

月を仰いでいるうちにいつしか過ぎ去った日々を回想していたという経験は多くが持っているものではないだろうか。あるいは、空間的に同一ではないところの月を思いやるという経験も、普通に誰もが持っているものではないだろうか。時間空間を超えて月はものを思わせる。初めに今を思う。明るい今宵の月に今現在を漂っていた心が、やがて、時の彼方へ、場所も遠く離れた彼方へと、さ迷っていく。宇宙の不思議は心を広げる。その昔から、その昔々から同じ月が同じこの場所を照らしてきた。人ばかりは同じというわけにはいかない。古来、これを幾足の詩人が詠んできたことだろう。中秋の月は雅に過ぎる。山々の木々が葉を落し、簡素さが極る冬枯れの頃の月は、常にも増して空間という果てしない広がりを中心にもたらす。

貝こきと噛めば臙の安房の國

（昭和49年）

山国甲斐に海はない。故郷に海を持たない龍太にとって房州は茫洋としたイメージを抱かせる国ではないだろうか。甲斐という古い国名には毅然とした響きがあるが、安房には潤いを帯びた春の臙にも似た柔らかな響きがある。歯応えもよくこきと音を立てた貝を噛んだ時、豊かな漁場をもつ海の実感が湧いたのだろう。貝は房総の海の幸である。「貝こきと」は安房の国すなわち海の国を具象化する。海についての未知の部分は少しも埋まらなかったとしても、口に含んだ貝の食感に安房の国が集約されたと感じ、既知を得た満足感が広がったことだろう。「こき」という音に触発され、その歯応えにおぼろげだった安房の国が実体をもって感じられた

のだろう。

たのしさとさびしさ隣る瀧の前 (昭和49年)

名瀑は観光スポットとなるが、信仰の対象となっているところも多く、無信心の人をして大自然に平伏させる威力がある。大概が山中や岩場などにかかり、容易にその前に立つことができない。物理的に困難な位置にあるため、心身を励ましてようやく辿り着くことになる。肉体を酷使した代償としてその全容を仰ぐ感動は大きい。自然の大きさが感じられ、方や人間の小ささが実感される。豪快な水の落下は人間界の現実をしばし忘れさせる。人は下界からさまざまな感情を携えて瀧の前に立つのだが、その感情を一時払拭するほどの凄さで瀧は人に迫ってくる。しかしながら第三者の目に人それぞれが背負っている感情が映るものなのか、楽しそうな背と寂しさを湛えた背が隣り合わせに並ぶということもあり得る光景である。

水澄みて四方に関ある甲斐の国 (昭和49年)

甲斐は山国である。それ故に水は一段と貴重である。もの皆澄み渡り、流れる大小の川にも秋が訪れ、水が澄む。谷あいの清流は澄みに澄んで魚影を走らせ、物影を映す。麓を流れる大河は彼方の山影を逆さまに映しながら流れる。水が澄めば澄むほどに影もくっきりと映し出される。川は流れ続けていつしか隣国へ、遠国へ、彼方の海原へと出ていく。山国甲斐は自然の山々が要塞の働きをなし、隣接の四つの国々を隔てている。昔は山越えには関所を通ったものであるが、流れる川ばかりはせき止めるものはなく、易々と国境を越えていく。甲斐山梨の地理と歴史とその風土を簡潔に描いて中秋の気配を漂わせる。

茸にほへばつつましき故郷あり (昭和49年)

中秋の頃になればさまざまな茸が採れる山間部、そこが龍太の故郷である。都塵を離れ、世俗に疎く、刺激の少ない山国であるが、数え上げればささやかな喜びや楽しみは四季折々尽きることがない。幸せというには慎まし過ぎる幸せの多くを山野などの自然がもたらす。中でも茸は秋の短い期間を限っての豊かな山の幸である。そろそろ出る頃かと思うところから喜びはスタートする。何かの障りで採りにいけなかったとしても、心にその香りが届いてくる。近所の誰彼の会話にも茸が匂う。季節は茸の匂いをまとめてやってくる。『種類は無数。のみならず食べ方もそれぞれ』とは龍太の随想の一節である。その随想の中で『山住みの愉しさをひとつあげよ、といわれたら、私は躊躇することなく「茸採り」と答えたい』と書いている。そして、『ただし、茸の出盛りはおおむね秋の農繁期に当る。そんなとき、一日中山をほつつき歩いている精農が居るわけがないから、農民としてあまり尊敬されない。したがって茸採りは万事隠密

行』と続き、その楽しさが綴られている。

冬の雲生後三日の仔牛立つ

（昭和50年）

仔牛の誕生は大きな喜びである。その喜びに応じて生後三日の仔牛が必死に足を踏ん張ってよろめきながら立ち上がった。生後三日を固唾を呑んで見守ってきた周囲の歓声に応じて、仔牛が一足歩む。その健気さに声援が飛ぶ。人間の喜びや歓声にはかかわりなく仔牛は本能的に立って歩んだことを、もちろん、人間が知らない訳はない。人々はただ感動の中にいたのである。生まれること。生まれた命は生きようとする。それが自然であること。平板な山間の明け暮れに大きな刺激をもたらした。季節は冬、そんな時の命はいっそう重い。重く垂れ込めた冬の雲は仔牛の前途を予感させるかのようなのであるが、悪環境に適応することがこの仔牛の生きることである。

2. 龍太「自選80句」拾遺

蛇笏忌や振つて小菊のしづく切り

（昭和46年）

蛇笏は、昭和37年10月3日、77歳で没している。その死から10年近くの歳月が流れた頃の作品である。10月といえば日本中が菊の香りに満ちる季節である。一步外に出れば庭にも畑にも色も形もとりどりの菊が咲いている。夜のうちに雨が降ったか、朝露を結んでいたか、しつとりと滴を含んだ小菊の一本一本を選んで切る。幾本か束ねて片手に持つ。滴を湛えて少し重い。花と花の間で滴が光る。束を振って滴を払う。光の滴が八方に飛散する。何気ない動作である。滴した花を切ればいつも誰もその動作をする。今朝、違うとすれば供花とすべく小菊を選んだことである。父に、いや、蛇笏に手向けようと切った小菊である。小菊にも畑にもその滴にも亡き父の面影が宿る。何一つとして父の目が注がなかったものとしてなく、ただその当人だけが不在の不思議をいえばきりが無い。その不在感にも不思議にも歳月はしだいに慣らしていく。父の忌日というのではなく、飯田蛇笏として認識する人の忌日である。今日の龍太は、俳人蛇笏として10年の歳月を思う。死後百年、千年、永久に輝く名を惜しみ、その作品を尊ぶ気持ちは歳月とともに強まる。不動の俳人である。

蛇笏忌は山廬忌として歳時記に登録され、昭和42年にはその功績を称えて角川書店が『蛇笏賞』を創設、毎年一回優れた句集に授与し、今日では俳壇の最高賞として定着している。最新号の平成23年の「白露」10月号に廣瀬直人が、〈山ありて山あり余る山廬の忌〉を発表している他、毎年、季語蛇笏忌は多くの俳人によって優れた句が詠まれている。龍太の〈蛇笏忌や振つて小菊のしづく切り〉は、俳人蛇笏の忌を詠み、公人蛇笏を偲ぶ句であるが、山廬の近くで採った小菊が在りし日の父子を髣髴とさせ、その四男龍太ならではの味わい深さがある。

眠る嬰兒水あげてゐる薔薇のごとし (昭和46年)

ガラスの一輪挿しに水切りをしたばかりの真っ赤な薔薇を挿したと想定してみる。水切りの効果は目に見える。薔薇の元気の具合は目で測れることに気づく。目に見えてガラスの水が減っていく訳ではないが、葉脈の隅々まで水が行きわたって葉の一枚一枚が生気を帯び、ぴんと上向く。朝露に濡れた薔薇園の薔薇さながら茎はしっかりと花を支える。その薔薇のように眠りに落ちた幼子の手足の指は先の先まで命をみなぎらせている。薔薇には新鮮な水が、嬰兒には深い眠りが生気をもたらす。少し萎れかかった花が水をあげていく視覚的な変化を、健やかに眠っている赤子の様子にも見出したのである。薔薇の命を愛でるように赤子の命を愛でる。健やかに眠る子の命を一輪の瑞々しい薔薇の命に重ねた洗練された感性である。「ごとく俳句」の誹りを完膚なきまでに打ち消させる比喩である。

村深くおのれの位置に夏樺 (昭和46年)

龍太の長男秀實氏に案内されて山廬を訪ねた。途中、山廬の全容を見下ろすとその後ろに一際高い木が眺められた。それがこの句に詠まれた樺の木である。直下で見上げると実に大きく高い。幹は太く、歳月を思わせる洞が空いている。秀實氏によると蛇笏も龍太も大切にしていたということである。それは竹林の中であって竹の高さまでは枝葉がなく竹の高さを超した辺りから枝が伸びている。竹に囲まれた環境に順応してか、樺が竹に譲歩してか、木にも事情や物語があるようだ。「おのれの位置に」は龍太自らの認識ではないだろうか。「村深く」はその環境をプラスに捉えていることを示す。第一句集『百戸の谿』には、<野に住めば流人のおもひ初燕 (昭和24年, 29歳)><露の村墓域とおもふばかりなり (昭和26年, 31歳)>などが収められている。帰郷し定住に至るまでの屈折した心理はいつしかほぐれ、村に深く根を下ろした心象をこの句に見る。

夏木さだかに住み馴れし地と思ふ (昭和46年)

故郷に定住した心境が素直に伝わってくる。故郷から出たことのない者や帰郷への迷いのない者が覚えることのない感慨である。山廬の後ろに続く後山にはさまざまな雑木が生えている。植えられたものも多く、それらの一木一木を手をかけ目をかけて龍太の生涯はあった。随想録をひもとけば春には何の木を植えようかと楽しんでいる龍太がいる。買った木は木の性格を見極めて最もふさわしい位置に植えられる。そうした後山を長男秀實氏が丁寧に説明された。樹木が最も旺盛に繁茂する夏である。自分も根を下ろし、この地に住み馴れたことに一入の感慨を抱き、それを然りと肯う龍太である。

偽りのなき香を放ち山の百合

（昭和48年）

夏の山野を行けばあちらこちらで百合の花に出会う。崖や山肌などに咲くことが多く、手の及ばない高嶺を見上げては、やはり百合は美しいと思う。その白さ、白も極まった清々しさ、少し俯き加減に恥らうかのように咲く気配、ほどよく伸びた丈もすっきりと美しく、近寄ると香気が漂う。いや、近寄りがたい香気をまとって咲いている。百合は清楚さの代表として汚れなき地位を独占してきた。百合子・小百合など女の名前として愛されてきたことはその証である。近年では改良された品種が妍を競い、強い匂いを放つものも増えてきた。それらも美しいが、飾り気のない素朴さの中に凜とした香気を漂わせている山百合には一歩も十歩も及ばない。花屋の店頭では同じ百合とするのが憚れるほど、噓せるように香る外来種が幅をきかせている。花束や献花に人気の品種は、毒々しい蕊を切り取って使われるが、香りばかりは手加減できない。それらは人工的な匂いがする。偽りのなき香は山野に自生の百合ならではのものである。

瀬を越えて木影地を這う晩夏かな

（昭和49年）

易々と早瀬を一つ跳びしてこちら側にある木の影が彼岸にまで伸びている。西日が投げかける影は長く伸び、その長さは日没が間もないことを告げている。太陽は西に傾き、夏の一日がようやく暮れようとしている。夏も終わりの頃は暮れなずむ時刻に気づく。上り坂の季節や盛り頃はこのような景色を見たとしても見落としてしまうだろう。暑さに慣れ、夏を惜しむ心に見えてくる風景である。

参考文献

飯田龍太他編(1977)『現代俳句全集第一巻』立風書房

飯田龍太(2005)『飯田龍太全集』第一巻～第十巻 角川書店

飯田龍太(2009)『龍太語る』山梨日日新聞社

山本健吉(1999)『定本 現代俳句』角川書店

(2011.10.4受稿, 2011.11.11受理)